

日本の近代とハイマート（郷土/故郷）概念

依岡 隆児

はじめに

近年、文学、民俗学、社会学、歴史学などのさまざまな分野で、「郷土」や「地方」「地域」という言葉が用いられ、高校・大学や地方自治体でも地域研究や地域学・郷土学を推進することもめずらしくはなくなった。文学や民俗学、歴史学で「郷土」や「地方」、「地域」がテーマ化され、¹在日作家や多言語作家などのディアスポラやエグザイルという言葉で現代文学をとらえなおす試みも多い。こうした議論の展開のなかで、その核となる「ハイマート（郷土/故郷）」という概念は多義的である。物理的・地理的空間なのか、主観的な想像の産物なのか、あるいはその両方なのか、ということが必ずしも判然とはしない。そこで、ここでは「郷土」概念を近代以降もっとも日本にこの方面で影響を与えたと思われるドイツとの関連で考察し、その多層的な構造を明らかにしてみたい。

以下、まず「ハイマート」概念の問題点を整理したうえで、ドイツとの関係を中心に郷土芸術・郷土文学の日本での移入・定着をみたい。「ハイマート」概念の定着・展開の出発点となったのがこの郷土芸術・郷土文学だったと考えられるからである。そしてそれとの関連で郷土研究や郷土教育のことにも言及し、最後に現代世界と故郷喪失の関係についても触れてみる。

1. 「ハイマート」概念の諸問題の整理

まず、ハイマート（郷土/故郷）概念についての論点をを並べてみると、

- ① 「近代」に対して：対近代の関連で故郷は伝統に組するが、近代国家形成との関連も有する。すなわち、戦前は国家アイデンティティの核として要請されていた。
- ② 「都市」に対して：都市文明の反動として「故郷」がクローズアップされて、それと関連して、観念・精神に対して身体・魂の領域に入れられた。
- ③ 「異郷」に対して：グローバル化の中では、ハイマートロスやディアスポラ、エグザイルという、移動に注目したあり方との対比で用いられている。

1 「故郷」や「郷土」を表題にした本としては、渡辺一民『故郷論』（筑摩書房、1992年）、「郷土」研究会編『郷土—表象と実践』（嵯峨野書房、2003年）などを参照した。

だが、ハイマートとこれらの近代、都市、異郷との関係は、実際には必ずしも対立しているものではない。近代化は伝統（故郷）と無縁ではなく、むしろ近代化の過程で伝統が要請され、作り出されたのであり、ハイマートは都市化・文明化を経て初めて発現するもので、かつ、人間のアイデンティティのよりどころとされる「物語性」を持つ。²つまりそれは都市住民の主観のなかにしか存在しないのであり、さらに故郷は異郷から顧みられるという、ハイマートロスという状態が生み出す想像であるともいえる。さらに、ハイマート＝郷土・故郷という概念の、情緒に訴えかける面が逆に近代化の中で利用されていたこと、つまり、叙情的なものがゆえに政治的だという側面も検討する必要があるだろう。ちなみに、「消費型ふるさと」³と言われる取り換えのきく「ふるさと」の商品化や観光戦略も興味深いテーマである。

「郷土」概念については、たとえば松本博明は「『郷土』とは何か—『故郷』と和解する場」（『國文学』第53巻10号）で、「郷土」と「故郷」をあえて分けている。つまり、「『故郷』は出郷者の側に認識される想念であり、『郷土』は在郷者の属性として認識される想念」、あるいは「個別固有の記憶としてある『故郷』」と「共同体意識に支えられる『郷土』」である。そして、近代において前者は後者に取り込まれ、共同体的想像に一元化されていったという。⁴たしかに「郷土」がより大きな共同体的区分を含意し、「故郷」「ふるさと」が古くから日本にあつて主観的で、心理・感情面での喪失感を属性としているとはいえるが、それも必ずしも明確に使い分けられてきたともいえない。近代西洋化以降については、やはりそこに西洋概念としての「ハイマート」が同様に個別的でもあれば共同体的でもあるニュアンスを内包していて、日本語の「郷土」と「故郷」両方がその訳語にあてられてきたのである。したがって、「郷土」と「故郷」をここでは等しく「ハイマート」の訳語とみなす。⁵

2 成田龍一「都市空間と『故郷』」、成田龍一、藤井淑禎、他『故郷の喪失と再生』青弓社、2000年、S.36。ちなみに、成田はここで、「故郷はアイデンティティと深く結びつき物語性をもつ表象であると同時に政治でもある」（S.36）としている。

3 安井真奈美「消費される『ふるさと』」、同書

4 『國文学』第53巻第10号、2008年7月号

5 『広辞苑』第六版（岩波書店、2008年）では、「郷土」は「①生まれ育った土地、ふるさと。故郷。『一の先輩』 ②その地方。土地。一愛『郷土愛』：生まれ故郷に対する愛情。『郷土玩具』：（大正以降用いられた語）その地方特産の玩具。③『郷土教育』：郷土への愛着と理解を重視し、郷土に具体的な教材を求めて行う教育。ドイツの教育思潮をうけて昭和初期に普及。第二次大戦後は社会科改革のために再び唱えられた。『郷土芸術』：①ある地方に特有の民謡・舞踊・祭礼装飾・建築装飾・玩具・各種工芸品などの総称。②（Heimatkunstドイツ）1900年頃ドイツで唱道された芸術上の主張。芸術は、その土地・人物・事件を反映するものでなければならないと考えるもの」（S.736）とある。一方、「故郷」は「生まれ育った土地。ふるさと。郷里。平家物語『二度と一に帰って、妻子を相見むこともありがたし』。『一を懐かしむ』」（同書、S.981）とある。また「郷里」は「①むらざと。郷邑。②生まれそだった土地。ふるさと。故郷。『一へ帰る』。『郷里制』：中国の地方自治制度。州県の下の地方区画として、漢や唐では100戸を里とし、里をいくつか集めて郷とした。→郷里制（ごうりせい）」（同書、S.740）とある。同じく「ふるさと」は「古里。故郷。①古くなって荒れはてた土地。昔、都などのあった土地。古跡。旧都。万

もともと、「郷土」という言葉の方は、後述するように、特にドイツから入ってきた「郷土芸術」や「郷土教育」という新しい思潮で用いられ、そうしたニュアンスで定着したと考えられる。「郷土」という言葉は教育勅語でも用いられていたが、もともとあった概念が西洋近代化以降に再定義され、新しい意味合いを加えていったと考えるべきだろう。

たしかに明治から大正、昭和にかけて、日本で西洋近代化や都市化に対する反動から地方や土着のものへの関心がたかまり、伝統の再発見がなされるなかで「郷土」という概念が意味をもつようになった。だが、この「郷土」がドイツからきた「ハイマート」という概念の受け皿になったように、この西洋近代化への「反動」、もしくは日本回帰自体がある意味で「西洋的」だったともいえる。近代と反近代のせめぎあいの中で、やがて日本も世界大戦へ巻き込まれていく。国民国家形成のために「民族」や「文化」が利用されたように、「郷土」ももてはやされていく。むしろ、この土着へ帰れ、というスローガン自体は決して非政治的なものではなかったのである。

2. 郷土芸術・郷土文学、郷土研究、郷土教育

2-1 郷土文学

「郷土芸術」Heimatkunst は文学の方面ではもっぱら Heimatdichtung（郷土文学）の意味で用いられていた。文学事典でみると（集英社『世界文学大事典』[事項巻]、1998年）、ドイツ語の Heimatdictung の訳語で、一般には郷土に根差し、その風物や文化、生活を描く文学を指し、ヘーベル、ゴットヘルフ、ヘラー、シュトルム、ラーベが先駆者である。しかし、郷土文学が問題になってくるのは、19世紀後半、産業革命による経済的社会的変化に伴いさまざまな矛盾の現れるなかで、近代化の流れに対して、地方的・郷土的なものが独特の意味を帯びて打ち出されていくときなので、自ずと郷土芸術（Heimatkunst）に結びついていく。これは反動的で近代化と都市文明を憎悪するものだった。アードルフ・バルテルスとフリードリヒ・リーन्हルトらの郷土芸術運動は農村を都会文明の退廃に、特にベルリンに對置し、農民を民族の生命力の根源とみなし、ドイツの本質の再生を求めた。第一次世界大戦後にはナチズムの「血と土の文学」につながっていった。

このように、文学事典ではドイツで19世末にすでにあった農村や田舎を取り上げ

葉集『一の明日香の川に潔身しに行く』②自分が生まれた土地。郷里。こきょう。万葉集『又更にわが一に帰り来むとは』③かつて住んだことのある土地。また、なじみ深い土地。古今集『人はいさ心も知らずーは花ぞ昔の香にほひける』（同書、S.2496）とある。以上の『広辞苑』の「郷土」「故郷」「郷里」「ふるさと」の語を検討してみると、四者には「生まれ育った土地」という点では共通するが、「故郷」「ふるさと」が比較的古くから日本にあった言葉であるのに対して、「郷里」は中国の行政語からきたもので、「郷土」は近代以降の西洋（ドイツ）から入った概念の受け皿になった言葉と考えられよう。

た郷土文学は産業化・近代化の中で生まれた郷土芸術運動によって反近代、反都市のニュアンスを付け加えて展開され、さらに民族主義的な国家理念形成に利用されたと説明されている。

日本でもこの「郷土文学」はまずは「郷土芸術」として紹介される。文学上の「郷土芸術」は片山正雄（孤村）の紹介からである。『帝国文学』に「郷土芸術論」を書いている。フリードリヒ・リーンハルトの論文「新理想」（1901年）に拠りながら、都会中心の近代の文学に対して郷土、すなわちその民族 Stamm とその自然を取り上げ、詩化しようとしたとしている。そして、この郷土への愛着、民族性はドイツ人の種族的、地方的感情、すなわち郷土的感情に富む文学によく表れているとし、郷土芸術の民族性を強調している。またこれが単なる「田園文学」より進歩している点であるとも述べる。⁶さらに人類全般においても一種の「郷愁」がある。人類の故郷とは「自然」であるが、自然から遠ざかり文明の弊に苦しむがゆえに人間は故郷なる自然を慕う。それゆえ文明を産出した民族は必ず一種の郷土芸術を持っている、としている。⁷

また、彼はのちに『岩波講座 世界文学』（1933～34年）で、現代文学の諸傾向のせめぎあいでは混沌を極めている 1930年代において新しい芸術として「新郷土芸術」があるのではないかと述べているので、郷土芸術に期待を寄せていたことがわかる。⁸

大正期には生田長江らの『近代文芸十二講』（新潮社、1921年）や三井光彌の『独逸文学十二講』（新潮社、1926年）にも「郷土芸術」のことが解説されているが、リーンハルト⁹の論を中心したもので、片山の解説に依拠しているとみられる。

昭和期には『岩波講座 世界文学』で立澤剛が「郷土文学」について執筆している。ここではヒトラー批判はドル買い精神を是認することであるとして、郷土文学の民族主義的で反米的な方向性を示している。郷土 Heimat という言葉は「日本語やドイツ語では流石に含蓄の多い情緒の表現ではあるが、英仏に於ては左程に珍重されないでも良い語彙に属しているかも知れない」¹⁰として、ドイツの郷土芸術運動はこれに先立つ時代精神への反感から出発したとする。自然主義の唯物論や世界主義、社会主義、新ロマン主義の芸術至上主義、主観的情緒的貴族趣味や気分、デカダンスへの反動であるとも述べる。またリーンハルトを長塚節の『土』と比較して、

6 片山正雄「郷土芸術」、『明治文学全集』第50巻（片山孤村集）筑摩書房、1974年、S.197（『帝国文学』第12巻第4号～第5号、1906年4月10日、同年5月10日）

7 同書、S.306 f.

8 片山正雄「現代文学の諸傾向 評論」、『岩波講座 世界文学』第11巻（現代文学の諸傾向）岩波書店、1933～34年、S.9 f.

9 Friedrich Liehnhart: Heimatkunst. In: Neue Ideale. Stuttgart 1920

10 立澤剛「郷土文学」、『岩波講座 世界文学』第14巻（各種文学）岩波書店、1933年～34年、S.7

郷土文学の持つ基本気分の楽天性を強調している。¹¹

同じく『岩波講座 世界文学』シリーズの成瀬清（無極）「文学史概説 現代」（第11巻 現代文学の諸傾向）では、文学思潮の推移変遷について有機的關係をなすものとしての「反流」という運動は正反対のものではなく、以前のもので内在したり並行したりしたものが優勢になったものと考えられることができるとして、それを同志の關係ではなく、兄弟、父子の關係であるとしている。¹²そのうえで、a)耽美的官能主義と b)神秘的象徵主義、c)郷土芸術主義の三つの傾向について、a)が狭義の印象主義で b)c)は新ロマン主義と呼ぶことができるが、a)b)は官能・神秘において分離は困難であり、この二つとも自然主義に含まれていたとする。それに対して「郷土芸術」は新ロマン主義であるが、自然主義とは対立している点で狭義の新ロマン主義とも異なり、「郷土芸術の運動に伴って独逸の新古典主義の運動が起こっている」¹³と述べる。

成瀬はこのように、「郷土芸術」を自然主義と対立する新ロマン主義的傾向の流れにある運動として文学史的に位置づけている。たしかにドイツでは自然主義と新ロマン主義の境界が曖昧で、その結果、新興芸術の諸潮流が錯綜としてしまってみえるが、ここでは自然主義自体の多面性が引きおこしたドイツ的なアレンジを加えられて展開された運動とすることで、「モデルネ」（モダニズム）の全体図の中で「郷土芸術・郷土文学」を位置づけているのである。

山岸光宣の『独逸文学の知識』（1934年）では、「亜流の文学」として「郷土芸術の運動」を紹介している。すなわち、「小説の方面に於ては、大都會の頹廢した社会から田園の健全な社会へ転向して、自然主義で鍛え上げた技巧を以て新境地を開拓しようとしたものが、所謂郷土芸術の運動である。此の運動は重大な文化的使命を持つてゐたが、芸術上に偉大な業績を上げることが出来なかった」¹⁴とする。郷土芸術の「文化的使命」は認めるが、力量がそれに伴っていなかった、というのである。

文学事典以外で「郷土芸術・郷土文学」がドイツとの關係で紹介された例は、俳句の雑誌にみつか。明治末に発刊された俳誌『屠雲』である。自由律俳句を提唱する主催者の荻原井泉水もドイツ事情に詳しい。この雑誌では「郷土」という言葉がドイツとの関わりで使われている。たとえば1915年の第5巻3号、4号（6月号、7月号）には「詩作と郷土」という小題のもと、「暁村」（雪山俊夫、ドイツ中世文学研究者）がドイツの作家の詩と散文を翻訳紹介している。第3号には「暁村」

11 同書、S.38. Hermann Bahr: Gegen die große Stadt. In: Essays. Leipzig 1912, S.201

12 成瀬清（無極）「文学史概説 現代」、『岩波講座 世界文学』第11巻（現代文学の諸傾向）、S.31.

13 同書、S.41

14 山岸光宣の『独逸文学の知識』非凡閣、1934年、S.232f.

によるリード文がある。

「北海の風光 軍艦、飛行船、水雷、水艇—北海は殺気横溢、今正に凄惨なる修羅の巷と化してゐるが吾等はしばし血腥い現実を脱かれ、詩作を通して北海の風光を臘気乍ら髣髴せしめようと思つて拙訳を取てすることとした」¹⁵

第一次世界大戦当時の、北海の情勢が急を告げている時代に、あえて詩を通してその風光を思い浮かべたいという。文明の極致たる世界大戦からの逃避として、反文明社会のシンボルとして、田園風景や海辺ののどかな風光が求められたからである。訳出した詩は、ハンス・ベトゲ「フウスム附近にて」、テオドオル・シュトルム「わが郷土」、グスタフ・ファルケ「寂しい牡猫」、フレンセン『三友人』の中の「北海」、オスワルトの『ランツウムの少年』より「スルト島にて」である。同じく第4号には「暁村」による「ホルシュタインの曠野 東海（オストゼエ）の島影」と題された章に、リーリエンクローン「曠野」、シュピールハーゲンの『問題的人物（プロブレマアチッセナツラレン）』より「リュウゲンの島影」、ティム・クレーゲルの『寂しき世界』より「ホルシュタインの曠野」が訳出されている。

いわゆる「郷土芸術」の代表と目されていたフレンセンやティム・クレーゲルも訳されていて、ドイツの「郷土芸術・郷土文学」を移入しようとしていたことがうかがえる。郷土文学は日本では農民文学・地方主義文学と同義となり、民族主義の意味はなくなり、ドイツ的ニュアンスは消えたという説もあるが、このように日本の俳句がドイツの郷土文学や自然をうたった詩に親近感を抱いていたこと（この点では、ベトゲが日本の俳句のドイツでの紹介者だったことも興味深い）と、両者が反文明・反都会、自然への親近性というスタンスを共有していたことがみてとれるのである。

2-2 郷土研究

大正から昭和にかけて、民俗学や教育運動の面でも「郷土」はキーワードとされた。「郷土研究」は柳田国男の唱えたものだが、これはドイツの *Heimatkunde* をモデルにしていた。1913年発刊の雑誌『郷土研究』がその普及に貢献した。なお、吉野正敏（「ドイツのハイマート・クンデと日本の郷土学に関する若干の考察」）は日本の郷土学の出発にはドイツのハイマート・クンデの影響はほとんどなかったとみられるとし、高木敏雄が『郷土研究』でドイツ語を使っていたのはアカデミックな印象を与えるためだったとしている。¹⁶だが、日本の郷土学がドイツのハイマート・クンデをそのまま受容したとはいえないまでも、それを意識し、モデルのひとつとしていたことは間違いないだろう。

『郷土研究』の第1巻第1号（1913年）の高木敏雄による序、「郷土研究の本領」

15 『層雲』（復刻版、不二出版、1996年）第5巻3号、S.4

16 吉野正敏「ドイツのハイマート・クンデと日本の郷土学に関する若干の考察」、『愛知大学総合郷土研究所紀要』第40号、愛知大学総合郷土研究所、1995年、S.69

では、「郷土研究の目的は、日本民族の民族生活の凡ての方面の凡ての現象の根本的研究である」¹⁷とされる。さらに郷土＝民族＝日本国家という図式を描き、「吾々は現在の日本を以て、日本民族の郷土とするものである」¹⁸と述べている。郷土は純粋な自然の一部ではない。民族生活の影響を受けた土地であると主張、世界中で日本は例外的に、国家と文化、民族の範囲が一致しているので、日本民族生活の研究は世界でも理想的なものであるとしている。¹⁹

また、小山田通敏の『日本郷土学』（1940年）では、新渡戸稲造が提唱した「郷土会」を継承し、「郷土思想と国家思想との関連の重要性」²⁰を説き、「科学性」を加味して、時節がら民族自覚のための組織を目指したとする。また興味深いのは、これが満州における国策的な開拓民定住のための「新しい郷土」運動にも寄与しようとしたことである。しかもそれはナチス・ドイツの国策的な居住事業をモデルにしていた。特に、日本民族の「血縁と土地」²¹というときには、ナチスの「血と土」のイデオロギーとの関連があることは容易に想像できる。ここでも第1章第3節の「ドイツの郷土科学」が、先行するドイツの「郷土学」を紹介している。

そればかりかドイツでの郷土科学の実践は国家的指導原理として意義を持つとして、「郷土からの分離に対する反動、近代機械労働に倦んだ慰安の欲求」²²が起こる時代において、このドイツの郷土科学は日本の郷土学の科学性の樹立とその実践指標として役に立つ²³、としている。さらに、第5章の「郷土学の樹立とその方法」では、「総合科学としての郷土学」については、ドイツ文学から地理学に転じた中目覚によってドイツの「ハイマートクンデ（郷土学）」を知り、その萌芽を新渡戸稲造の『農業本論』に見出したとしている。²⁴その新渡戸の果たせなかった「郷土学」をここでは「日本中央郷土研究所」の設立という形に結実させようとした。この試みがドイツ系の理論とその実践を模範にしていることは明らかである。実際この本の最後では、こう述べられている、「ドイツの国土計画が、『農村共同体としての郷土』をその根基としてゐるやうに、満州国に於て今年度から企画に着手されてゐる国土計画、またわが日本に於ても、企画に着手されようとしてゐる国土計画に於て、当然、郷土がその根基となるべきを思ひ、われわれ郷土学徒は一層その責務の重大なることを痛感する」²⁵こうして、これに先立つ三十年前に萌芽がある「郷土研究」は、戦時下の国土計画や植民地政策において復活し、民族主義的色合いをさらに強めていったのである。

17 『郷土研究』第1巻第1号（1913年3月）、S.2

18 同書、S.4

19 同書、S.11f.

20 小山田通敏『日本郷土学』日本評論社、1940年、S.12

21 同書、S.3

22 同書、S.26

23 同書、S.30

24 同書、S.329

25 同書、S.344

2-3 郷土教育

このように、郷土を民族の核として注目するというあり方にはドイツからの影響がたぶんにあった。そればかりか、郷土を教育に結びつけるということも、同じくドイツからの影響があったと考えられる。

明治30年代から大正期にかけて、郷土科が主張され、教育の「郷土化」が起こった。すでに1891年の教育勅語の小学校教則大綱には地理や日本歴史に「郷土」の語があったし、1908年の内務省の地方改良運動や新渡戸稲造の「郷土会」（1910年～1919年）、「^{じがた}地方学」（1898年）の提唱もあった。こうした流れを受けて1930年から郷土教育運動が展開されたのである。この運動は国体論や日本精神、大政翼賛会の理念へとつながり、「郷土」を軍国主義のなかでやがて「皇国」形成の精神主義的母胎とした。1933年の『郷土教育講演集』は文部省が主催した国家主導による教育政策の一環だったが、これは「新教育」に叶うものとされた。モデルとなったのは、やはりドイツだった。その中の、吉田熊次「教育学上より観たる郷土教育」では、郷土教育とは文部省が全国に奨励する初めての新教育²⁶であり、郷土教育の本質は「郷土を対象とする教育」²⁷であった。それによると、これはドイツでも盛んに唱えられていたし、郷土教育という言葉はドイツ語にしかない。Heimaterziehung、実際は Heimat-Schule という語が多く使われたが、これは「郷土学校」のことであり、新教育で言われている Lebens-Schule ということになる。生活主義の教育を施すのが「レーベンスシューレ」で、具体的な生活に即した郷土教育は一種の新教育、新学校であり、「ボーデンステンデツヒ bodenständig」、すなわち、土地に即し、具体的なドイツ人の生存している、その国土に即した教育を指していたとされる。²⁸さらに、森岡常蔵「郷土教育に対する所感」では、郷土教育は近年、特に世界大戦後に盛んになっているようだが、この傾向はとりわけドイツに多いように思われる。1927年に小学校の規定改定で、教授の郷土的原則が唱えられ、「ボーデンステンデヒカイト」と教科目の相互連絡関係が強調された。世界大戦後の国民に郷土を愛する念を強める必要を感じたということが基礎にあったとし、特にドイツやオーストリアは戦争で不利な位置に立った国で国民に対して殊に郷土を愛する念を喚起する必要が感ぜられたから、両国で教育の郷土化の考えが盛んになったのではないかと述べられている。²⁹また、郷土教育を文部省で考えたのは、「要するに従来の如き形式的な抽象的な教育に流れずに実際生活に切実なる教育を施して行く意味で、ひっきょう有為の国民を作りたいと云ふ本意に外ならないものであります」³⁰とし

26 文部省普通学務局郷土教育連盟編『郷土教育講演集』刀江書院、1933年、S.7

27 同書、S.8

28 同書、S.8f.

29 同書、S.47f.

30 同書、S.53

ている。この文部省主導の郷土教育運動がドイツの動向を強く意識していたことは明らかだろう。

当のドイツ本国で「ハイマート（郷土）」概念がナチスの「血と土」のイデオロギーに取り込まれていったばかりか、日本でも1910年の『郷土研究』においてすでに、これは民族・国民国家の研究に収斂していくとされていた。「郷土」概念自体がもともとときわめて民族主義的な志向性と排他性を持っていたといえるだろう。「ハイマート」を好んで歌ったドイツ・ロマン派が愛国主義的で民族主義的な下地を持っていたのと同様に、日本においても郷土文学や郷土研究、郷土教育の展開にみたように、軍国主義の流れの中で「郷土」が総動員されていったのである。

したがって、次に問題となるのは「郷土」概念からナショナルスティックな要素を腑分けして取り出して見せることというより、「ハイマート（郷土）」がナショナルなものに向かうのがアイデンティティ（拠り所）の補償のためであること、そして「ハイマート（郷土）」が担ってきたアイデンティティの補償の機能を認めつつ、そこから「ハイマート（郷土）」を相対化する視点をいかに手に入れるかということになるだろう。

3. ハイマートルスと現代世界

3-1 ハイマートルスと日本近代

小林秀雄が「故郷を失った文学」（『文藝春秋』、1933年）を書いたとき、故郷というものを持っていなかった彼は、故郷を懐かしがることのできる人をうらやむ一方で、その状況を日本の近代が抱える宿命として受け入れるという態度を示した。頭で理解する郷土ではなく、やはり彼は物理的で実体のある故郷/郷土を、できれば持ちたかったのだろう。それがかなわないということを認め、開き直ってそのこと自体をある種の拠り所にしたのである。そこにはハイマートルスをハイマートとするという覚悟のようなものが読み取れる。

徳島で幼少期を過ごした中野好夫も「ハイマートルス」という言葉を使い、自らの生い立ちについて述べている。「わたしやわたしたち一家が徳島県の人たち（中略）から受けた芳情は、いまもって忘れ難い。にもかかわらず、どこまで徳島の地に同化しえたかとなると、やはり疑問である。いまにして思うと、少なくともわたしの場合、結局は他所者（よそもの）としての十五年余ではなかったのか。もっと適切に言えば、『故郷知らず（ハイマートルス）』の人間としての十五年でなかったのか」³¹ 英文学者で翻訳家、批評家であった中野好夫は、二歳から十六歳までの人格形成期を徳島で過ごしている。だが、彼には徳島を「故郷」と呼ぶにはいささか抵抗があったようである。

31 中野好夫『主人公のいない自伝—ある城下市での回想』、筑摩書房、1985年、S.11

小林秀雄が「故郷を失った文学」で、近代化を追求してきた日本では結局は足元の具体的な生活が見捨てられ、生活が極めて抽象的なものとなり、地に足をつけた人間が見られなくなったとして、そうした近代人の一人としての自らの文学をも「故郷を失った文学」と評したのは、彼が東京生まれの都会人であったことも確かにその要因だろう。だが、たとえ地方に生まれていたとしても、この近代化の時代、人一倍西洋に憧れ、身近な文化を疎んじた中野のような近代人も、「故郷を失った」境遇は同じであり、こうした「抽象人」の一人だったことに変わりはない。

ところが、終戦直後、その中野が「地方文化の意義」というエッセイを発表している。そこでは、「単なる都市文化の浅薄な模倣でなく、地方自体の特質の上に立った強力な文化」を郷土人の中から育成すべきだと主張していた。戦後、戦争協力を反省し、平和運動や辛口の社会批判を続けた彼は、戦後は一貫してこの「地方文化」という「中央」を相対化する視点を持ち続けたとも言える。彼はこうした地方性に戦後の新しい文化の可能性を見ようとしていた知識人の典型といえるだろう。

中野は西洋文学に志すなかで、かえって日本の近代化の皮相さを味わってきた。と同時に、それが実質のないものと見えるのは、まさに自分たちが西洋や中央の文化にかぶれて、足元の文化を省みなかったためだったと思えた。その結果として、戦時中に国家に絡めとられていた自分たちの文化の脆弱さが、戦争を通して身にしみて感じられたのである。中野はここで自分たち知識人が戦時中に戦争に加担したのは、西洋かぶれで拠り所をなくしたためであったと総括しているのだが、ただ「郷土」や「地方」という概念が戦前・戦中において反西洋文明的とはいえ、近代的な民族主義的イデオロギーとして使われていたということに関しては無反省のようである。彼の地域性の主張も図式的で、どこか「抽象的」に響くのは、そのためなのかもしれない。

3-2 ハイマートロスとエクソフォニー

小林秀雄が、ハイマートロスがハイマートであるというところから近代日本人は出発せざるをえないと考えたとすれば、それは現代ではどうなっているのだろうか。多和田葉子のエッセイ「生^{くに}立ちという虚構」（『カタコトのうわごと』、1999年）では、生まれ育った東京、国立は故郷なのかと問い、そこになつかしいという感想は持てない、と述べている。国立のことを書こうとすると、すぐ嘘を書いてしまう。架空の町のような。〈東京〉はただの言葉にすぎない、と。³²都会生まれの現代日本人にとって、東京はハイマートとは言えない。しかし、小林秀雄と違って、だから寂しいとは彼女は言わない。

多和田はそのままドイツへ旅立ち、違う言葉の中で生活することを選ぶ。日本語が一度崩れていく場所が必要だったと述べ、こうした境界に生きることを自発的に

32 多和田葉子「生^{くに}立ちという虚構」、『カタコトのうわごと』青土社、1999年、S.31

選択したことを、彼女は「エクソフォニー」＝母語の外に出ることと名付ける。言葉と言葉、文化と文化の境界にある「溝」のようなところにとどまりたいという彼女³³は、「エクソフォニー」であることを選んだ現代的ハイマートロスな人間の姿なのかもしれない。

多和田葉子・徐京植^{ソキョンシク}『ソウルーベルリン玉突き書簡 境界線上の対話』（2008年）には、こうした「エクソフォニー」的あり方ゆえに、逆にドイツ人のハイマートへのこだわりが当初理解しがたかったことが述べられている。

（多和田）「わたしも外国に移住した人間ですが、どこに帰ったらいいのか分からないから寂しいという気持ちを持ったことはありません。帰るという発想がないのです。それなのにドイツ人はよく、『あなたはハイマートを失ってしまったのではないのか』と心配してくれます。それがなぜなのか、わたしはもう何年も前からずっと気になっていました。故郷をあらわす『ハイマート』という言葉はナチスの時代に悪用されたために、『祖国』という言葉と同じく嫌な味わいがあります。ドイツ人が外国人のハイマート喪失に同情するのは、『自分の国に早く帰ればいいのに』というような外国人を排斥する気持ちの表れにすぎないのではないかとって、わたしはこれまで大変批判的でした」³⁴しかし、彼女は戦後の引揚者の映画を見て、理解することになる。それは、ダンツィヒからドイツに移住し、故郷を失う経験をした男性のインタビューだった。「追い出された彼らに共通しているのは、自分の故郷は奪われただけでなく、故郷はもう存在しない、という思いです」³⁵として、「『あなたは故郷を失ってしまったのではないか』とわたしたちの状況を心配してくれるドイツ人の多くはそういう歴史を抱えているわけです」³⁶と述べる。

ドイツ人に対して「ハイマート」という概念が持つ意味が、多和田には奇異に思えたのだが、その歴史的側面を理解することによって別のハイマート観に気づくことになった。その「古い移民と新移民」の対立という構図は、「定住」ということを前提とせず、絶えず移動し続ける状態がノーマルであり、移民/定住民の問題はある歴史的時点での切り取り方の問題だというニュアンスがある。ここでは、ハイマートロスな日本の作家がドイツの「ハイマート」概念の重層性を知り、現代世界と「ハイマート」の新たなつながりを再発見している。³⁷

33 同書、S.34f.

34 多和田葉子・徐京植^{ソキョンシク}『ソウルーベルリン玉突き書簡 境界線上の対話』岩波書店、2008年、S.163

35 同書、S.165

36 同書、S.166

37 「エクソフォニー」ではなく、「ディアスポラ」という言葉をドイツとの関連で使った人として、国際政治学者の姜尚中がいる。自伝『在日』によると、西ドイツに留学して、ギリシア出身のガストアルバイター（外国人出稼ぎ労働者）の家庭の出の仲間と知り合い、「ディアスポラ」というあり方に目覚めた。そして帰国後、東アジアの共存のために自分の在日としての「ディアスポラ」的存在が意味を持つのではないかと考えるようになったという。小田実も1980年代に西ベルリンで生活した体験を持つ。そのとき生まれた娘は、

ハイマートを最初から持たないと意識する作家たちが、そのハイマートロスな存在を現代の文化的・社会的状況において創造的な意義を持ちうると積極的に主張する一方で、具体的なハイマートを常に意識しながら、物理的には帰郷がかなわないとしても内面的にはつながっていくことで、かえって物理的境界を越えていくというあり方もある。むしろ、こうした出自とのつながりを維持したまま新しい文化・社会で創造的な働きをするという方が本来の意味での「ディアスポラ」といえるかもしれない。³⁸たとえばこの点においてドイツとの関連では、来日したドイツ人作家ギュンター・グラスと大江健三郎の対談にみられる「周縁性・地域性」と「故郷/故郷喪失」の問題も興味深い。³⁹だが、それについて論じるのは、また別の機会に譲りたいと思う。

おわりに

以上、「ハイマート」概念の近代日本における変遷をドイツの関係を中心にみてきた。「郷土芸術・郷土文学」はドイツから入ってきた新しい概念だったが、これがたとえば自由律俳句などの日本の文学に潜在していた「ハイマート」感覚に触れて、それを発現させていったと考えられる。ところが、これは狭い地域性を意味するばかりではなく、「民族」「国家」を意識させるものだった。また「郷土研究」や「郷土教育」においても、それはドイツ的な民族主義をベースにした近代国家形成に大

という。小田実も1980年代に西ベルリンで生活した体験を持つ。そのとき生まれた娘は、在日朝鮮人のパートナーが生んだ子だった。このとき彼は改めて国境の存在を痛感し、ハイマートの感覚を相対化するきっかけを得たと考えられる。

38 参考、戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』明石書店、1999年

39 ギュンター・グラスは戦争で故郷ダンツィヒを追われた「東方難民」のひとりとして「故郷喪失者」となった作家である。そのグラスが1978年に二週間、日本を旅行した。そのとき大江健三郎と対談し、特に「地域性」ということを話題にしている。大江健三郎との対談「文学と戦争体験—地域性の力」(『海』1978年)では、こうグラスは述べている。

「私の出身地は、今日ではポーランド領となった旧ドイツのダンツィヒでして、しかも郊外のヴァイクセルという河の河口のあたりの地方で、私は作家としてそこから完全に離れることはないと思います。(中略)私は、文学の場は大都市ばかりではないし、中央志向、大都市志向というものは、文学の障害にさえることもあると思う」

文学は具体的な地域に根差しているもので、それは必ずしも地方だけにすぎならず、大都市であってもかまわないし、また実際大都市から文学の新しい潮流が生じたことも否定できない、だが大都市だけでしか文学が生まれないとしたらそれは文学の障害になる、というのである。その意味ではまさに二人の作家がハイマートである「地方」にこだわったことは世界文学的に裾野を広げたということができる。ただ、大江がここで文化人類学の道化理論を援用して、文学における「周縁性」の力をもつばら問題にしたことに、グラスは違和感を感じていたと思われる。グラスは多くの場合、むしろ文学は大都市で生まれ、地方はその後追いをしてきたということを指摘している。都市中心の文学を相対化する地方からの文学の存在価値を認めはするものの、近代文学が都市中心であるという事実は否定しないのである。むしろ、グラスの論点は都市か地方かという対立ではなく、ハイマートの地が現実には失われているということ、その喪失という状況から具体的な想像力を発揮させる可能性を引き出しているということにある。

きな役割を果たすこととなったと考えられる。一方で、近代化によって土地から離れ、都市生活の中で自らの存在が抽象化されたと感じた作家たちは、かたや代用としての「故郷」を文学に求め、かたや都市にこそ「ハイマート」を見ようとした。戦後にはさらに、故郷喪失（ハイマートロス）を自明のこととして、あるいはより創造的な機能を果たしうる状態として受け入れ、新しい創造世界を切り開いていく作家たちが現れた。ただ、現代世界のグローバル化はいまだ民族主義的な帰属意識との緊張関係にある。こうしたなかでのディアスポラ状態を日本人が真に理解するには、このハイマート概念の歴史性を知る必要がある。むしろ、現代の日本人はこのグローバル化した世界における「ハイマート」の意味をドイツ人から学んでいる面も見られる。

他方で「ハイマート」概念が地方の問題を考える際に無批判に使用されている。「ハイマート」を狭い血縁的・民族主義的關係に自閉させることなく、相対化しながらいかに普遍的な価値に鍛えるか。いたずらに都市や近代性、異郷と対立させても、それは所詮「反動」でしかない。むしろ現代は、それらの対立が実はより普遍的な価値を支えるコインの裏表であったことを見直し、アドルノが言うように、あえて「ハイマート」にいて寛がず、異郷にあって「ハイマート」を見る心構えが求められている時代なのかもしれない。

（本論文は、拙論「近代日本におけるハイマート（郷土/故郷）概念の基礎的考察～ドイツとの関係から」、徳島大学総合科学部紀要『言語文化研究』Vol.16、2008年を大幅に加筆・修正したものである。）